

## 第八回

### 国語と日本語の連携を考える会

2001年7月28日

於：早稲田大学日本語研究教育センター

8階会議室

#### 後半（ディスカッション）

細川：それではフリーディスカッションに入りたいと思います。あまり交通整理などはいたしませんので、どんどんなたからでもご意見をお出してください。よろしくお願いします。

小林：三宅さん、門倉さん、お二人のお話には大変共感するところも多かったです。では、まず三宅さんのほうからご質問させていただきます。レジュメの2枚目で「レポート作成に必要な指導」ということで、3-1と3-2とあげておられまして、これには全く同感なのでございますが、こういったことが、実は小中高等学校の先生の論文の中にも随分おかしなものがある。といいますのは、一昨年の「日本語学」という明治書院の雑誌の特集で「気になることば」というものがありまして、私も執筆依頼をうけましたので、「気になることば10項目」というのを書きました。書いた中に、小中高の先生方が、エッセイではなく国語教育に関する専門誌の論文に気になるものがいくらかもあるんですね。

この学生さんほどではないにしても、「...かなと感じる」のような、気にし始めるといくらかでもあるんです。そのころ私は静岡の常葉学園大学に勤めておりましたので、それらを全部抜き出して、「現代語研究」というもっていた授業で、どこがおかしいのか、どう直せばいいのか、ということを経験名・論文名を挙げて出したんですね。それが毎年毎年変えなきゃならない。どんどん出てくる。ですから、学生に勉強してもらうのもいいんですが、その前に、小中高の先生方の、自戒の意味も込めまして、我々の文章作成力をつけないと、学生だけに負わせてしまっては気の毒ではないかと、思いました。

それから、お二人の発表にかかわりますが、実は学習指導要領に関係することがかなりありまして、門倉さんに伺いますが、批判的思考というのは実は昭和35年の指導要領と45年版の指導要領には載ってるんですね。たとえば35年の高等学校の1番目の項目、3項目あるんですが、「生活に必要な国語の能力、言語文化に対する理解の能力の深め、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにして言語生活の向上を図る」というのがあるんですよ。しかも第1番目に。45年版はどうかというと、やっぱり載ってるんですね。2番目になりますが、「国語による理解と表現を通して、思考力・批判力を伸ばし心情を豊かにする」というのがちゃんとある。私は、45年版の時、改訂に参加して、協力者会議の一員でしたが、54年版になるとなくなっちゃうんですね。なくなった理由は何かについてはどこにも書いてないんですね。そこで門倉さんのを拝見してなるほどと思ったのは、よく調べくださった、1960年ですから話が合うわけで、アメリカの影響が出てきたの

かな,と。それが定着しないでなくなってしまった,ということを門倉さんのお話伺って,納得しました。伺いたいのは,千葉大学に勤めておられた宇佐美洋先生という方がおられますが,あの方の「論理的思考」という本,門倉先生はどのように評価されますか。

門倉:残念ながらその本は読んでおりませんが,この本の中に宇佐美洋さんのことが出てきて,井上尚美さんと宇佐美洋さんともう一方との3方で,1950年代に批判的思考力を日本の国語教育の中にどう取り入れることができるかということ,具体的にテスト問題として作成中である,ということが出てくるので,そのテスト問題はどこに行ったのかなと思っておりました。宇佐美先生も国語教育の中に批判的思考力を養う要素をたくさんいれるべきだという主張で活動されていたということもこの本から知りました。

小林:私は宇佐美先生を存じ上げていますが,あの方のお書きになったデジタルフレンド社から出てる「論理的思考」というB6版の薄い本ですが,私が常葉学園大にいるときに学生に「君たちはまず論理的思考ができてないから」と「論理的思考」を読ませて,それよりレベルの低い学生,といっても教育学部でそんなにレベルが低いわけではないですが,それでも低い学生には岩波ジュニア新書の「小論文を書こう」という成城学園の工藤さんの本を読みなさい,と。そうすると,やっぱり連中は反省しますね。「...かなと感じる」はまずいな,と。そうするとどんどんよくなってきたと思いました。そう宇佐美先生に申し上げたら,大変お喜びでした。

それからもうひとつ,門倉さんの最後の「言語編」の単元ですが,これは私が小中学校の現場に出ていたときに使われていたものなん

です。これがなくなってしまった理由はいろいろあるとは思いますが,私自身の自戒も込めて周辺を見渡してみると,国語の先生の多くが文学部,私は国語学出身ですが,中高の国語の先生は圧倒的に大学で文学専攻であった方が圧倒的に多いわけです。それで文学編ばかりやって,言語編は非常に不真面目であったのではないかと,自宅用のかな読み物にしてしまった人が多かったのではないかと,私を含めて周辺を見てみますと,そのような感がありますもので,両方うまく使いこなせばいいんでしょうが,片一方ばかりつかって,片一方はぜんぜん使われないということが起こって,一方は自宅においたままになってしまう学校,生徒さんが多かった。そこら辺もひとつ反省すべきことかな,と思いました。それから,時枝誠記編の中教出版の言語編は,私はとてもいいものだと思います。こういうものを書いた先生が本当にしっかり教えてくれたら子供の,三宅さんのような実例は,少なくなったんじゃないかと,思いました。

門倉:この井上さんの本の中でも言語編がつぶれてしまったのは学校の先生が文学的で,言語編をもてあました,と,先生がおっしゃられたように,言語編を教えなかった,教えられなかった,ということでした。私もアメリカの影響があると思います。言語編の出た背景には。ですから,先生方が文学編だけではなく,言語編の教育を自身が受けていないので,教え方も手探りの状態であったんだろう,とおもいます。カリキュラムはずばらしいものであったけれども。そう推測したんですが。

小林:小中学校の教養養成の段階で,論理的思考をもうすこし育成するようにしないと私

は救われなと思います。同時に、高等学校の中でも、たとえば社会科の中で、論理学というのがどういう位置を占められているのか、社会科の教科書は一度も見たことがないので私にはわかりませんが、もう少し高等学校の教科の中で日本語を教えるということをやらねばならないだろう、社会科でも、英語でも、というように、国語だけではすまない問題だという気がいたしました。

三宅: だいたいおっしゃられたことだと思います。先生方の文がおかしいというのは、大学でそういうわけで、学生はレポートを書くときに、フィードバックがほとんどないんですね。いいもわるいも、受け取られるままに4年間経って卒業していく。育たないんですね。教員養成でも。そういったトレーニングがないので。それから、文学部ですと、やはり文学志向の強い先生が大学にいらっしゃるわけで、大学の先生の中でも国語学や日本語学は文学を鑑賞する道具のようなものと思わされていらっしゃる方が多いんですね。いわゆるサブというような形で。そういう先生から習う場合は、やはりそういう形でまた現場に送り出されてしまうという悪循環がおこっていると感じます。

田部井: 足利工業高校定時制で教えております田部井と申します。昨年の夏の研究会から来させて頂いて大変勉強になっております。今日の発表も大変共感することも多くて勉強になりました。

とりあえず「批判的思考力」というものを国語の教師として勝手に私なりに分析させてもらいますと、テクニクの結果、発揮される力もあるとおもいますが、もうひとつ、「心の体力」がついてこない、人の意見に対して反応できない、恐れない力、これはとても

根深いものがあると思います。

生徒たちの日常会話を聞いていますと、「～というか」など、人の意見をまともに受け止めないで、だんだんずらして行って、結論にいたらないで、うやむやにしてしまうというパターンが多いのではないかと思います。こういうような体力というのをつけるのも、学校で、教室で行うべき、ひとつの使命ではないかなというふうに思います。それに関連してですが、三宅さんの発表の中で、私の耳に残っている言葉がありまして、それは「日本語に対する自覚がない」、自覚、ということです。私が国語教育をいろいろ考えた末に授業で実践しているのは、この資料の3にもありますが、ファイルブックの提出の義務化、ポートフォリオ評価、というものをポートフォリオ学習と捉えまして、1週間のはじめに、この区間の目標は何なのか、どういった目標からするとどういった関連があるのか、さあそれをやっごらん、ということを発表しまして、生徒に発表させて課題の学習活動というものもありますが、学習を振り返っての活動というものも必ずさせることにしています。たとえばこの課題は先生のオーガナイズでは出せない??とか、誰々君の和歌はとてもよかったとか、誰々君の和歌の批評はなんであんなにできるのか私にはわからない、といったような振り返りをさせていくと、そういうことが、わりと自覚を促していく。評価、相互評価の繰り返しというのが、言語技術をつける面で大変重要なのではないかな、ということを実感として思っています。先ほど小林先生から教師の文章力ということで問題になりましたが、私はつたない文章しかかけませんが、私は生徒と一緒に、私のクラスでは表現活動とか入れることが多いですが、そのと

き私も一緒に書いて、その場で批評しあっていく、ということによって学生にも助けになりますし、私の中にも響くところがありますし、次の授業のデザインも生まれてくると思います。ポートフォリオで相互評価ということを使い、相互評価ということをするだけでなく、生徒の作品といたしますか、活動の結果として出たものを利用して、ワークショップという形で授業を展開したり、カウンセリング的な手法を用いて、あまりにも能力差のある生徒が活動の最中に、定時制の授業というものは多くても10人ほどという寺子屋のような小ぢんまりしたクラスの中で、展開していく、そういうことをやっております。最近、生涯学習で行われております、ワークショップ的な技法に興味をもっておりまして、たとえば、カウンセリング的な手法ですとか、KJ法ですとか、ポスターセッションですとか、伝え合う工夫というものを授業にも取り入れているんですね。この間は、工業高校の生徒ですので、単元を「ものづくりに生きる」ということで組みまして、その中でいろいろはじめに5つの話をばらばらに配りまして、どれをやりたい？と生徒に選ばせて、カーナビゲーションシステムの話を取り上げることになりました。ポストイットを一人5枚渡しまして、何がすごいかそこに書け、ということで、それを私が読んでいって、これはすごいね、といって3人がすごいと感じると、3つそれを貼っていくわけです。そしてそれをもとにして、私が次の時間にそれをワープロで打って、こんな意見があったけれど、なぜそれがすごいと考えられるのか、意見を書きなさい、というような、次の時間の学習活動を組みましたら、その中にこんな意見がありました。「すごいのは、すごいんだ。説

明できないから、すごいんだ」と。なるほどな、と、さすがにやるな、と思いました。定時制の生徒の批評力は、体力はあるというのはそこなんですね。テクニックはないんですが。体力はあるんですね。そこで、なぜ、何がすごいのかを説明しなければいけないのかというのを授業で説明しました。たとえば、トヨタのセルシオに最初に搭載されたカーナビゲーションシステムは音声表示をする、それがすごい。ある生徒はこういうことを書きました。運転しているときはカーナビの画面を見るわけには行かないからすごいんだ。そういう意見があった中で、これが説明していることだよ、というように、なるべく、ここにもありました、国語教育の丸罰式教育ですか、結局授業者が全部答えを言ってしまって、学習者は必死にノートをとってそれを暗記して試験に書いて点数をとるといった、まあそんなに簡単な図式ではありませんが、割と端折って言っちゃうと、そういうところが国語教育のダメな部分があると思うんですね。もっとも、すべての先生がそんな授業をしているとは申しませんが。もう少し学習者同士の意見交換や相互批評の中から教師の狙いや仕掛けを組み立てていって生徒を高みに連れて行くというような取り組みが、これからは必要なのではないかなと、あらためて今日は自分の方向性を確認する意味でも有意義なご発表だったと思います。

Critical Thinkingを育てるためのいろいろな、さきほど言語編の話もありましたが、自分なりに生徒に入る意味？で教材化に取り入れて、今後活かしていきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

三宅：そういう授業をなさっていて、学生はとも幸せだと思います。とてもよく考えてら

れて。

まず、数の問題で幸せだと思います。たとえば批判することに対する消極的な気持ちを学生は持っていて、みんなで話し合うと良くなることはたくさんあるのに、みんなの前で批判しあうことに躊躇していることもあるし、批判されることに対する傷つきというものもある。批判というのを、いわゆる「けなす」ことではない、ということをはかして学生にわからせるかということが非常に大きなポイントです。先生のように、少人数のクラスでひとつの空間を作ってしまうればそれが可能だと思います。やはり、60~80人のクラスになってしまうと、そういう考え方の人がいても、どうしても全体の中で難しくなってくるので、そういう小さいクラス、せいぜい30人くらい、といったところで、そういった根を少しでも育てていけば、社会を変えることはできないにせよ、そういう考え方の人が増えていく、と私は考えて、なんとかくじけずにしようと思っています。

門倉：今の批判というのはけなすことではないということはすごく重要なところだと思います。特に、「批判的思考」と訳しているものですから。野矢さんの本に批判の意味合いについて書かれていて、それに共感できたんですが、立論という主張があるとき、それに対して批判をするということと、異論を述べるということは違う、と。異論というのは、ある人の立論に対して反対の立場、議論を展開すること。批判というのは、必ず対立するものではなく、立論に対しての論証を批判するんです。ある意味では、立論に対しては共通の土俵に立って、もっとより強くその論理を高めているためにすることもあるので、批判と異論というのを区別しないといけない。

だから、仲間内であっても弱い部分を共通の土俵に立って補うというような姿勢を育てていく必要がある。先生の言われた、体力、と論理力はつながっていくところがあると思います。でも大勢としては批判=けなすこと、と受けとられることが多いので、野矢さんも最後のところで「トレーニングをつんで習得した技術を家族に試さないように」と冗談を。批判についてそれに耐える力、論理的体力をお互いに養っていくことが、まず学校教育のなかで目指されることなんじゃないかな、と思います。

三宅：きょうはこういう発表があるということで、たまたまいろいろ本をばらばらと見ていたんですね。そうするとある表現法のテキストに「何箇条」というのがありまして、その中に「批判をするな」というのがあってびっくりしたんですが、そのときの著者が使っている批判というのは、いわゆる人をけなす、ということではあるんですが、我々が使う意味の中には、やはりけなすことという意味が非常に強くあるので、批判とか批評とかいう言葉を、もう少しみんなで整理しなければいけないのではないかという気がします。

竹長：今ちょっと気がついたことなんですが、批判ということについては、けなすという問題と同時に、学問の世界でも何か狭いところをつついて、揚げ足取りをして鬼の首を取ったというようなところもありますよね。ですから、学生には批判ということをもう少しうまく説明しないと、論題を逸れているようなところで、揚げ足取りのようなことが。というのも、私はゼミや授業で学生にいろいろ質問はありませんか、議論はありますか、と、学生にいろいろ発表させてるんですよ。それ

に対して学生がいろいろ意見を述べるんです。質問したり、意見を述べたい人はいませんか、と聞いて。すると、私のことを気にしてかどうかわかりませんが、何か出さなきゃいけないだろう、ということで何とか探しますが、発表者がレポートで意図したこととは違うような、土俵の上には乗ってこないようなところでいろいろ意見を言う。そうするとレポーターも答えられなくて、重箱の隅をつつくようなことを言ってる。質問した学生としては、いいことを言って、ちくりと刺した、というような得意な面があるんだけど、私は聞いていてレポーターにも気の毒だし、ああいう意見や質問の出し方はいいものだろうか、ということをつくづく感じるんです。ですから、学生は批判ということ自体があまりよくつかめなくて、抽象的になりますが、レポーターの主張する意見に乗った上で、さらにそれを広げていくような生産的な批判や質問がいいんですね。だけれど、私が聞いていて、どうでもいいようなことを言ってるな。でも質問したほうは、レポーターに一矢報いたというような得意げな満足をしている。そこに私が水をさして言うと、今度は質問した学生がしょげちゃうわけです。ケチをつけられた、と。傷つけるのはいやだからみんな黙っている中で、せっかく勇気をだして意見を述べたのに、先生は評価してくれなくて、受け入れられない、としょげちゃうんですね。ですから、あとから呼んで、あなたの意見はこうこうなので、私はあなたを批判したわけではない、ということを取りかどく説明しないと、その学生は二度とゼミには出てこれない、というような人間関係があるので、私は難しいなと思います。学生は質問や批判の仕方をよくわかってないと思

いました。

門倉:野矢さんがいいことを言っていたんですが、「批判するということは、拒否するために批判するのではない。いっそう重要な強調したい批判のあり方は、理解するために、あるいは受け入れるためになされる批判である。それゆえ、結論には共感しつつもなおその論証に対してこれはおかしいと声をあげるといってもおこりうる。そういうのは問題を共有する者たちによってなされる共同作業であり、あえて波風を立ててそれによって地盤を固めるのだ」これがひとつの批判のあり方だと思います。

それから、先ほど先生がおっしゃいましたことは、参考文献に挙げました「Asking the Right Questions」での、こういう批判にいたる前に質問することが前段階として必要な作業だ、よい質問をすることは建設的な批判力につながるということが Critical Thinking で良く言われているようです。そうすると、良い、正しい質問の仕方というのも重要な教育領域の一つだという気がします。

三宅:今の批判の学生の問題は私の授業でも良く起こる問題です。つまり、批判するということは、お互いがそれによって理解が深まり自分も伸びていく、という意味で批判するわけですね。批判や質問をしなければわからないことがいっぱいあるわけですから。そういうことがベースなんだということ言ってるんですが、そういう批判や質問になれていないと、自分の中で Excite してきてしまって、そこまで言うつもりはなかったのに言ってしまったというようなことが起こったりしたんですね。それで教師の役目というのは非常に大事だということになります。言われ

た人で下手に傷つく人もいるし、言った人もそれで一点取ったと思われてはまずいし、みんなの前でクラスを収める必要があるといつも思っています。何のために批判や質問をするのか、ということをつもっているつもりです。私自身も批判や質問をしますが、それはあなたが悪いといっているのではなくて、こうすればもっと良くなるのではないかと思うので言ってるんだと、いつもいつも言っています。これは学生のグループダイナミクスとも関係があります。ある年は、何人かがそういうことをわかっているとうまくいくし、ある年ではだめだったりします。ただ、うまくそういう場を作ればきっとうまくいくことがあると思うんですね。それは次のクラスになっても何かの形として残ると期待しています。

加納：東京水産大の加納と申します。この4月から始まりました大学生のための教員養成コースで教えさせていただいておりますが、今日はお二方の先生方のお話、大変興味深く拝聴させていただきました。門倉先生にお伺いしたいのですが、Critical Thinking を批判的思考、とずっと日本では訳されてきていますが、Critical という語を辞書で調べてみますと、英和辞典ですとやはり「批判する」とか「けなす」という語しか出てきませんが、英英辞典を調べてみますと、examin という意味が載っておりまして、examin というのは「吟味する」という意味が日本語ではあると思いますが、そういう意味で、対決や対立するということを目的にして人の言うことを聞くのではなくて、どこまで話を理解すべきなのかということを検証することが、吟味するということで、私がアメリカの大学でやらされた Critical Reading では、批判だけ

ではない、ということを感じましたし、ここで紹介されてますような教科書も大学の担当者の間でいろいろと検討しましたが、学生は「批判」ということばに非常に敏感に反応してしまうので、「分析的読解」という語をテキストでは使うことにしまして、分析的、というのでは Critical Thinking の一部しか採れていないということはわかっているんですが、吟味するということ形容詞として入れる方法が見つからなかったので、分析的読解と呼んでいます。学生に対しては、有名な人が書いているから信じるというのではなくて、本当にこの人の言っていることがどこまで正しいのか、正しいということについても、賛成できる具体的なポイントを自分で例をあげて論拠を挙げて自分の言っていることを証明せねばならない、ということをおっしゃっています。戻りますが、批判的という訳が出てきてしまった背景というのは、どうしたことだとお考えになるでしょうか。

門倉：参考文献にあげた、ゼックミスタらの1996年にでた訳本では批判的思考ではなく、「クリティカル・シンキング」と、そのまま訳さないで書いていて、この本はクリティカル・シンキングの全体像がつかめて良い本ですが、この本の初めのほうで著者たちは、Critical の意味を明らかにしようと論じています。そこでは、デューイという教育哲學家の「反省的思考：Reflective Thinking」という思想が受け継がれているものが Critical Thinking だ、と言っています。最近の訳では、そのままクリティカル・シンキングと言っているほうが多いようです。それはやはり訳者が「批判的」ということばの響きを嫌ってのことだだと思います。言いにくいから「クリシン」と呼ぶ人もいますようです。

?: 初めて出席させていただきました。私は、青山学院短大で言語表現を担当しております。それから留学生への日本語教育も担当しております。今日のお二方のお話は大変参考になるお話でした。まず「言語表現」というときに、お二方のお話は主として「書く」という技能を中心に指導してらっしゃるということで、三宅先生のご発表では、レポートを書く際の論理的思考をどう表現していくか、ということをご指導されていることでした。「書く」ということは、外国人に日本語を教えておられますと、一番最後になってしまいます。動機付けが非常に難しく、「書く」という作業に入る前に、いろいろな動機付け、いろいろと面白い素材を集めて、ディスカッションして、そしてそれをポートフォリオの形で自己批判や他者の批判をいれて、色々な形で構成していく、ということを今うかがっております。特に、三宅先生が「書く」ことを中心にされているということでしたら、「読む、聞く、話す」といったほかの面をどのように取り入れていらっしゃるのか、あるいは、動機付けをどうされていらっしゃるのか、ということをお伺いしたいと思います。

三宅: 私は「現代日本語表現」を持っておりまして、一年生主体の半期の講座ですので、まず困るのはレポートだろうと思ひまして、書くことをまず入れてるんですね。後期になってから、話すことも入れていきます。日本語教育の具体的なプロセスでは「話す」ほうが先だろうと思ひますが、Practical な理由で「書く」ことを先にしてるんですね。「話す」ほうでは、発表する、とかいうことよりも、いろんな Situation でどんなことが求められ

ているか、ということが中心です。動機付けについては、書くことに焦点を絞ったのはとくにありません。書く技術をどう伸ばすか、ということが中心なので、何かを書かねばならないと言う人が来ているので、その辺は日本語教育とは事情が違うかと思ひます。じゃあ、どうやって動機付けするかというと、課題をどう選ぶか、ということだと思います。若い人たちは自分のことばに実はかなり関心を持ってらるんですね。そう思ひます。例えば敬語に関しても、非常に興味を持っていて、バイトなどでマニュアルを学んでいるからということだけではなく、例えば、うちの大学の宣伝活動の一環として「ミニライブ」という1時間の授業を各先生がやるんですね。去年もやったんですが、私のタイトルは「日本語再入門」ということにして、「あなたは自分の使っている日本語をわかっていますか」というサブタイトルなんですが、その人気が2番に入ってたんですね。それを聞いたときに、やっぱり自分のことばをみんな知りたいんだな、と強く思ったんですね。ですから、この授業では、イントロを長くして興味をひきつける、というようなことはそれほどしなくてもいいんです。ただ、「若者ことば」と「若者とことば」では違うわけですから、自分のことばと持っている課題とをどう結びつけて遂行していくかということは、いろいろ刺激をあたえていかないと進んで行かないと思ひます。

?: 私も日本語教育なんですが、書くと言うことは読むということと表裏一体ではないかとすごく思ひます。私が日本語の上級などで、こうした課題をしますと、いいレポートを読んでいないと、つまり、しっかりとした構成のものを読んでいないと、いいものは書けな

いと思うんですね。私自身のことを考えてみても、高校までにそういうことを意識して論理的批判的な読み方は全くされていなかったとつくづく感じまして、それはお話にもありましたように、文学部の先生による授業だったということもあると思いますが、その辺の視点で大学生にも論理的な文章を読ませるということも大切な事だと思います。

三宅：そうですね。とても重要な事だと思います。ただ、半期という制約からやりたくてもできないというのはあります。それから、人間というのは、表現作業でも、「～じゃないかな」はいけない、「～ではない」だ、と教えると、はいはい、と聞くんです。でも実際には、書いてみるとやっぱりやるんですね。いいものを習うというのも大事なんですが、やってみてはじめておかしさに気づくということもあるので、学生は読むとか Passive なことはこれまでにやってきているので、今はとにかく自分のレベルでいいから自分で Produce してみることも、非常に大事な事だと思います。

？：関連しますが、論理的な文章を教えるということですが、論理学の立場からご覧になって、高校生や大学生が論理的な文章を書くにあたって、何かお勧めの本をご紹介いただけませんかでしょうか。実は、私が上級を担当しておりますときに、教材として、たとえば新聞の社説などは構成がわりとしっかりしているものですから、序論・本論・結論が、非常に明確に出てきますので、構造が読みやすいということで。しかし、本当でしたらもっと拡張の高い読みに耐える文章を使いたいと思っておりますが過ぎしあぐねております。もし教材としてお勧めいただけるものがありましたらご紹介ください。「まず、つぎ

に、結局、最後に」などと形は作られているのですが、取って付けたようで、矛盾した結論になっていたりなどしているものですか。

門倉：私は、高校生からはもちろんのこと、小学生あたりからでもクリティカル・シンキングの考え方を取り入れてもいいのではないかと考えております。そうした場合には、必ずしも書くことだけではなく、先ほどクリティカル・リーディングと申しましたように、まず読むことから始めるのも良いのではないかと考えております。先ほどご紹介しました論理学の先生が書かれたこの本も、もっぱら読むことを取り上げています。ただし、ここにあるのは論理的な文ばかりなのではなく、逆に、どこがまずいのかということを考えることがいい訓練になるというものです。よい文章に触れることは素晴らしいことですが、文章に構造を読み取ること、論証の構造というものを読み解くことが重要だと考えます。この本では接続詞に注目していて、接続詞がなくても、もしつけるならばどんな接続詞が入るのかを考えよう、ということを言っています。私も同感で、論理力の練習とは、良い文章を読めば自然に良くなっていくというのではなく、たとえ悪い文章でもどこが悪いのかを見つけていくことなどが非常に大事なんだと思います。ですから、ある意味では、どんな文章でもかまわない、ということになります。

桐生：早稲田の日本語センターと国際教育センターで教えております、桐生と申します。先ほど話題になりました「批判的」ということばについて小さな提案をさせていただきます。ほかの大学で夏季集中講座をやっておりまして、今ちょうど3週間目に入らんですが、

「批判的」という言葉に抵抗を感じるということが出てきました。担当しておりますのは、どちらかというアジア系の人が多いクラスですので、「さあ、批判しましょう」ということはできませんので、考えました。そこで、肯定的に何かを言って、良いことをまず言わせよう、ということにしています。何でもかまわないのですが、話し合いの糸口として、今までで良かったこと悪かったことをあげましょう、と聞き出すんですね。そうするとみんな無理をしてからでも何か言い出すんです。そうすると、黙っているタイプの人が多いクラスなんですけど、だんだんとエキサイトしてきて、そこはこうしたほうが良い、こうすればもっと良くなる、というような批判的な意見・評価が出てくる。そういった経験がありましたので、小さなことですが、ご報告いたします。

穂積：東京情報大学の穂積です。ご紹介になりますが、今日、たまたまクリティカル・シンキングということで持っていたものですが、参考文献に挙げられています、ゼックミスタ&ジョンソンの訳者たちが、もっとわかりやすく、ということで執筆した『クリティカル進化論』というものがあります。これは「O.L進化論」という4コマ漫画をもとにした、話し言葉で書かれたもので、高校生や大学1年生には良いものかと思います。見開きで4コマ漫画が片方に、もう片方にクリティカル・シンキングの話が載っています。

次に、質問させていただきませんが、本学でも流行のアカデミック・デヴェロプメント(?)のなかで、認知技能教育としてクリティカル・シンキングの教育をやっているんですね。その中で私がもっているクラスでも少しやっていたんですが、行き詰まっているんです。

話し言葉のことを日本人学生向けにやってみたんですが、前期のアンケートを取ったところ、国語っぽい授業はイヤだ、と真っ向から批判されました。先ほど先生が、みんな言葉には興味を持っている、とおっしゃいましたが、それは文学部の文学科の学生だったからであって、私のところでも敬語を少し、待遇表現という枠の中で捉えるといったことを話したのですが、「敬語なんて知ってるけど、使わないからやりたくない」ということなんですね。今日、ここにもたくさん国語の先生もいらっしゃると思いますが、今、学生が、国語がイヤだという一番大きな理由は何でしょうか。話し言葉についての授業をやっているにもかかわらず国語っぽいのはイヤだと言われてしまう理由について、お心当たりある現場の先生からのご助言を頂戴したく存じます。

三宅：私の学生は、概論は日文の学生ですが、表現法は社会学部や経済学部などいろいろな学生がいます。ただ、必修選択で取ってるんですから、何とかしようと思って来ているわけで。また、日文でない学生からのコメントには、確かに、大学に来てまで国語をするとは思わなかった、というものはありました。ただ、国語というものをどう考えているのかということは疑問です。

？：桜美林大学1年の？です。私は国語の授業を中高でほとんど寝ていた側の学生なんですが、国語の何がつまらないか、といえば、自分が読めばわかる文章を、どうして他人がいちいち口をはさむのかがわからない、ということです。自分で読んで自分で考えてるほうがずっと楽しいのに、いちいち先生に一つ一つ言われたら。そして、その感想まで先生に言わなきゃならない。でもテストがあるか

ら、そのために勉強する。解答も、自分の考えたことではなくて、先生の求めているものを書く。だから面白くなかった。古典や漢文も好きではなかったけれども、文法などを覚えねばならないし、訳だけ読んででもどうにもならないし、入試にもある。悪循環で、結局、国語という科目は、文章を読むことが好きだったのに、結局好きにはなれなかった。読むものがどうかということではなくて、国語そのものが好きになれないわけです。

竹長：私ももとは高校の教員をやっておりました。今年から大学では授業の方法を変えたんです。三宅先生が最後に書かれています、新学習観とか、学生と教師との新しい関係、ということにかかわってきます。従来は、私は、テキストなどを配って、学生に話させて、最後は私がまとめたりするようなことをやっていました。ところが、なかなかそういう授業では、はじめの20分で、学生は寝ちゃったり携帯がなったり、退屈して、黒板を書いているうちにいなくなってしまうようなこともあるわけです。そこでもう教えるようなことはやめて、いわゆるテキストというか勉強の内容は配って、発表したいものを選んで、発表者を募って発表させる、ということをしています。そのあと、学生に質問などさせる、ということをしています。私はオブザーバーとして、最後にまとめたり、学生が答えられないようなことにコメントしたり、といったことにして、学生を主体にしました。この前、試験をしまして、授業の感想や要望を書けといいますが、そういう授業は大学にあまりないので新鮮で良かった、ということでした。学生が自ら発表するというのは大変ですが好評なようです。何が言いたいかといいますが、国語の授業も、大学を含

めて、何かのテキストの解説を教え込むということに終始することが多いと思うんです。学生自身が活動することが、調べるとか発表するとかいうことになると、雰囲気はやはりちょっと違うんですね。同じ立場の人間が発表するということになると、教師から言われるのとはちょっとスタンスが違ってくるんですね。ですから、今回のやりかたは良かったのではないか、と思っています。そのまま任せきりでは、抜け落ちるところが出てくるので、フォローは必要ですが、ともかく、授業の形態についても見直していかなければ、大学人としてまずいのではないかと思います。小中学校では、活動型授業が行われているようですが、上に進むほど、古い授業スタイルは残っていますので、今日、三宅先生がお書きになっていることに同感なわけです。ただ、大学の授業が高校までの授業と違うことは、人数が多いということです。多くなると、発表させるのも、感想としてありましたように、まじめ学生と、エスケープする学生が出てきます。そのあたりをどうコーディネートするかというような問題はあるにせよ、方向としてはこうした流れが必要なのではないかなと思います。

？：多分、ここにいらっしゃる方の大半は、国語・日本語教育にかかわる方々であると思いますが、私は2年前に会社をリタイアしたビジネスの世界から来た者です。正直に申しまして、大学の関係者からの話などを聴きましても、最近の学生は質問をしない、すると先生に申し訳ない気がする、などという声があるわけですね。ここでの話を聞いておられますと、こういった問題はビジネスの世界では10年前からすでに困っている問題なわけです。大学を出た新入社員が、会社での言葉づ

かいを知らない、レポートを書かせても誤字脱字は多い、論理は一貫していない。そして、彼らの書くことで得意なことといえば、好きか嫌いかといった感情の問題。実際、新入社員の研修を私がしておりますが、毎日9時から17時まで私が話すだけになってしまいますので、毎日感想文を書かせていたわけですが、話の内容についてどれが重要かどうかというものもありますが、今日は眠たかった、面白くなかった、といったことが感想文として出てくるわけです。感想文だから何でもいいということもありますが、少なくとも新入社員研修としてやっているわけですから、常識としてどういうことを書くべきなのかということが、そういう者たちの頭にはないということです。そういう問題で考えてしまったのは、大学の中では、ディベートやブレインストーミングといったような捉え方で授業をすることはないのでしょ。うか。そうすれば、何らかの意見を自分から言うということができると思うんです。それに、社会で何かを言いたい時には、それがダメとされたときに、次にどうすればいいのか、どういう提案をすればいいのか、という2つか3つの多方面からの提案をもって主張するわけです。クリティカル・シンキングというのも、多元的思考法と呼んでもいいのかもしれない。定年してから大学に入りなおしたわけですが、大学は遅れているという感じがしました。ビジネスの社会では、カスタマー・サティスファクションということが重視されています。大学にとっての顧客はだれか、顧客は何を求めているのか、ということを考えれば、大学の教育自体のあり方を変えることにもなると思います。そういう観点からみると、ものを考えるとはどういうことか、ということす

べてを含めて、クリティカル・シンキングとは何かだけではなくて、教師は教えて学生は聞く、というあり方の中にはまってしまって、学生は方向をどんどん変えていって、実は教師は追いかけていっているようになって、扱える範囲が狭くなっていってしまっているのではないかと、批判的にみると、そんな感じがします。

門倉: ビジネスの問題は、参考文献の2番目「MBAクリティカル・シンキング」というものがありますが、これは、会社での批判的思考としてどういうことがありえるのかを追求するもので、おもしろいものでした。その次の本は看護の領域におけるクリティカル・シンキングを扱ったものです。こうした実務領域への応用に結び付けてクリティカル・シンキングを考えていくのは、本筋としてあるのかなと思います。そういうときに、国語教育や日本語教育という教育領域においては、担当者はその現場というのをどこに見つけていくのが課題となると思います。

三宅: 先ほどのカスタマー・サティスファクションという話ですが、大学はそれに気づくのにすごく遅かったと思います。少子化になってくると当然考えねばなくなっていて、ここ数年悪あがきしています。今日の私の発表では、最後にあまり触れられませんでした。これからの教育は変わらなければならない、ということで、おっしゃることと同じようなことを言ったつもりです。ブレインストーミングやディスカッションも当然、行われています。ただ、ビジネスでは実利をまず考えますが、教育では教育としてのディスカッションということを考えるので、今日のディスカッションで出たように、ディスカッションすると批判することが出てくる、批判されたり

しなきゃならないのか、というような問題が出てくる。つまり教育の場でのディスカッションというものを考えねばならない、という問題はあると思います。

?: ディスカッションというものが、慣れによって、最初の1~2回だけだと嫌になってしまうかもしれないものが、だんだん自分の意見を言うことで説得させるということが、コミュニケーションのツールとしてのディスカッションと捉えることができるようになると思うんですね。人間は一人一人違うわけですから、それぞれが違っていることを受け止めるということにもつながると思います。

もうひとつ、ビジネスの世界は実利の世界ではありません。そんな時代はとっくに終わっているんですね。最近では、お客にどう満足を与えるか、それが結局まわりまわって自分のところにつながってくるということであって、目先の利益を求めるところは、ブラックリストに載って銀行から融資を止められるようなところなんですね。

田部井: 国語の時間は眠い、ビジネスの世界から離れている、という話が出ましたが、今、一番学校で大事なことは、話あいなら話あいで、その目的は何なのか、ということをはっきりさせることではないでしょうか。なぜ読むのか、なぜ要約させるのか。

それから批判を単なるけなしあいで終わらせないためには、私の場合は比較的少人数のクラスですからできるのかもしれませんが、否定しないことがあるかもしれません。すごいはずごい、と言われたときに、ピキッとくるのを押さえて、うん、すごいはずごいよな、と認めてしまう。そうすると、そこから生徒の中でまた新しい話題が始まります。ただ、それは好みの問題だよな、好みの問題と書い

てあることとはレベルが違うよ、といったん置いて、話を転換させる。つまり、学習者に対して、教師は、なぜ「すごいはずごい」ではいけないのか、そこをきちんと説明する責任があると思います。その責任を果たさない限り、互いに信頼したなかでの学びという場は形成できないと思っております。

?: 文化庁から参りました。ことばは大事だからきちんと使うべきだ、という考えについての世論調査がありますので、ご報告いたします。そういった気持ちは働き盛りの世代では非常に強いんですが、若い世代では、ことばは通じればいいので細かいことは気にしなくても良いという考えが増えているんですね。それから同じ質問を分析してみると、書き言葉については正しく整えるべきだが、話し言葉はかまわない、という意見が、特に若い層で多いということがわかります。つまり、教育では書き言葉についての教育はできるけれども、話し言葉については軽視している可能性が見て取れます。

それから、言葉をつくして自分の考えていることを伝えるのは大事なことだと思うか、それとも、言葉を使わなくとも気持ちが伝わるのが大事だと思うか、という質問もしました。予想としては、日本人の伝統的な言語観として「察し」というのがありますから、高い年齢層で後者の割合が高いと思ってお降りましたが、実際には反対で、働き盛りを中心として高い年齢層で言葉をつくすべきとの意見が多く、若者はその反対でした。どうも、ことばをきっちり使っているという意識は若い人に育っていないのではないか、という懸念があります。

それから、先ほど田部井さんのおっしゃりました「体力」の問題にかかわると思いますが、

なんとなく通じればいい, というような考えには, ことばに体力を使って伝え合おうという意識が少し弱いのかな, という気がします。そのことが, クリティカル・シンキングを哲学のほうから今日は考えるということでしたが, 人間形成においてことばをどう捉えるか, ということを考えねばならないと思います。この点について, お話を頂戴したいと思います。また, 学生さんが, 他人から言葉を受け入れるばかりで, 発することが不得意だという話がありましたが, 今のクリティカル・シンキングを進めていけば, この問題は解決するのか, ということについてご意見を伺いたいと思います。

三宅: 私は, 若い人を見ていると, 正しいことばを使うべきだ, という質問文に反応してしまっていて, 実は, ことばづかいは気をつけているように思います。ことばづかいは, 正しいとか丁寧とかということではなくて, 相手への距離感とか親しみの度合いとか, そういったことへの敏感さなんですね。語彙はないんだけど, すごく気にしている感じがします。聞き方によっては, 違う解釈が出てくるのではないかと考えています。

クリティカル・シンキングが生き方を変えるかということですが, 教室だけでやっても, 社会的なところでその意味がどうあるのか, 今の社会ではやはり欧米流のクリティカル・シンキングの考え方は根付いていかなないので, そのあたりは考えていかねばならないと思います。

?: 私も, クリティカル・シンキングと社会のありかたとのギャップについては, 考えていかねばならないと思います。それから, 世論調査の解釈ですが, いくつかの質問項目を総合的に捉えねばならないと思います。「今の

言葉づかいは乱れていると思いますか」という質問には, 中学生, 高校生が, 一番乱れていると思っている割合が高いんですが, その中高生自身が, 中高生の言葉が乱れている, と感じていると答えているんですね。内容としては, 乱暴で人を傷つけるような問題を使っている, といったような, 言葉の正誤ではなく, 対人関係についての考慮についてが高くなっています。その他, 関連するデータもありますので, 全体をご覧いただければと思います。

小林: はじめに名乗らなかった気がしますので, 改めて, 小林邦夫でございます。ビジネスの世界の方から厳しくも有意義なご意見を頂戴しましたが, 私はこれまで9つの大学等で教えてまいりましたが, 比べてみますと, 昔に比べれば, 今の大学での授業形態はきわめて良くなっていると思います。ただ, どの大学でも今, 授業評価というものをやっていますが, 学生が無記名で評価するものです。私の科目でも, 全クラスについて, 無記名で最後1回前に書いてもらっています。いろいろと反省させられるところもあって, 最後に意見を紹介して, それに答えています。これは反省すべきだ, これは誤解ですね, などと。しかし, 科目としては社会科学系に多いわけですが, 概論をやっちゃう, これをやるとどうしても講義になっちゃう。数は減ってきてますがね。学生に発言させると, 何が出てくるかわからないので, 大変なのは大変なんですけど, でもおもしろい。そういう授業をやる教師が増えているのは確かです。しかし, 哲学概論, 論理学概論をグループ・ディスカッションでするといっても, なかなか難しいところがありますね。科目によるところもあるかもしれませんが, 100人規模のクラ

スになるとどうしようもないですね。

それから、教師と学び手との間の人間関係力、つまり、あの先生にだったら何を言っても大丈夫だろう、というような信頼がないといけない。私の場合は、授業の最後に、出席カードの裏に意見を書いてもらって、次の時間に、前回の反応の要約を発表して、答える、ということをやっています。名前を伏せてくれと言ってくれれば名前もふせますよ、と言って。お互いに、意見を交換していこうということですね。

？：私が結局学ぶことが必要だと感じたのは、ビジネスの世界に入ってから、コミュニケーションの問題や実務の問題にあたった時なんです。学校の先生も生徒からのフィードバックがあるように、ビジネスでも上司や部下から査定を受けるというシステムがあります。それから、気づくのは、感想文にしても感動がないということですね。つまり、起承転結というようなことではなくて、浮かび上がってくるようなポイントがない。右へ倣えで。誤字があろうと脱字があろうと、そんなことより、光るポイントが一番重要なわけで、そういうものが少ないなあという気がいたします。

細川：そろそろ時間になりました。今日の議論の中では、国語っぽいのは嫌、という意見をどう解決するのか、ということについて、具体的なものがまだ見えてこない、ということでした。もう少し、実践したことをくぐって、国語側、日本語側から意見が出てくればと思いますが、それは次回以降に期待することにしていしましょう。次回は1月末の土曜日を企画しておりますので、よろしく願います。本日はどうもありがとうございました。